

4-1

“事故をおこさない”から“事故がおきない”の視点へ

「気付き」の強化（「気付き」こそ最善の事故防止策）

リスクマネジメント

事故対策

特別養護老人ホーム 神明園

職種・発表者 役務部 主任 石原 健太	共同研究者：伊藤勝敏・大内健史・関谷和久
所在地 東京都羽村市神明台 4-2-2	共同研究者：佐藤尚十
TEL：042-579-2711	E-mail：info@sinmeien.or.jp
FAX：042-579-6868	URL： http://www.sinmeien.or.jp

今回の発表の施設 またはサービスの 概要	東京の西部に位置する羽村市（人口約5万6千人）に、市内3番目の特養として平成11年に開設し、今年で10年を迎えました。『楽しみ』『くらし』～そして『よろこび』を理念に掲げ、身体介護のみに終始しない生活援助の実践を目指しています。
----------------------------	--

◆ 取り組んだ課題

従来から介護事故防止の取り組みとして、事例からの検証を行っていたが、どうしても発生対応型の報告に偏重が見られ、対応が後手に回っている印象がぬぐえなかった。そこで、18年度より事故対策委員会を組織し、介護現場の指導職が直に事故問題対応に直面する機会を増やし、ヒヤリ・ハット様の事前対応型報告を増やすことに取り組んだ。

◆ 具体的な取り組み

○事故対策委員会

- ・介護現場の指導職を主とした委員構成。
- ・報告書様式の変更。
- ・報告事例を事故発生、未遂、可能性の示唆とレベル区分し、各段階の報告状況を把握。
- ・レベル毎、および近似事例の対応策を検証。
- ・検証結果の研修等へのフィードバック。職員間での報告事例の共有、理解の検証。

◆ 取り組みから露見した新たな課題

○委員内でのレベル判定標準化。

○職員個々に関する問題

- ・報告書作成スキルの標準化。
- ・報告書作成者の固定化傾向、事故対策意識の温度差

○事故対策意識の高まりによる安全管理偏重思考と生活自由度確保の融和。

◆ 活動の成果と評価

○委員会内でのレベル判定標準化に向け、会議内にて事例内容・レベル区分判定の再確認を行う事で委員内でのレベル判定の標準化が進み、事例の発生要因別検証が進んだ。

○レベル区分判定に応じた情報伝達・情報共有によりヒヤリ・ハット様報告が増加。結果として重大事故発生の可能性を秘めた事象について事前に対策を検討・実施し、事故発生を回避できるケースが増えた。

○報告書作成に関し、職員個々の理解度に応じた個別の指導を実施したことにより、報告書作成スキルの向上がみられ、正確な情報の把握ができる事象が増えた。

○事故対策意識・理解への温度差、および報告書作成者の固定化傾向に対し、報告書作成の意味と必要性を伝え、事故対策意識の啓蒙に努めた。しかし、発信された対応策の周知と実施が不十分である等の課題を残している。

◆ 今後の課題

○研修等による事故対策意識向上への働きかけ、対応策の周知、実施徹底の強化。

- ・報告事象の多角的“気づき”強化を継続的に啓蒙。
- ・報告書作成者固定化傾向の改善の指導。
- ・生活自由度を確保しながらの“事故がおきない”環境づくりの推進。
- ・上記の強化を行なうことでの、情報過多による理解障害への対応。

【メモ欄】